

『沈黙行』

インターネットは、決して主人公にならない。
人は考え、人が動き、
その足跡として発信すべき何かが生まれる。

インターネットはあくまで
人生の小道具なのだ。

PIPED BITS

「ルイ・パスツール」 アルバート・エーデルフェルト

『時空を共有する人』

4月4日、音楽プロデューサーのつくくみ氏が、母校である近畿大学の入学式に登壇し、約7千名の新入生へ祝辞を送ったというニュースが話題になった。スクリーンに流れる後輩への温かいメッセージ。昨年10月に声帯の摘出手術を受け、声を失っていた同氏。プロの歌手として多くの観衆を魅了してきたその声が、入学式の空間に響くことはなかった。

通信技術は進化し続けているが、インターネットを流れるデータの主役は未だに文字情報だ。四半世紀前のポケベル、15年前のメール、今ではLINE。時空を越える文字情報。何処にいても何時でも友達とコミュニケーションできる。インターネットは、コミュニケーションから距離と時間の制約を取り去ってきた。

2月から世間を騒がせている川崎市の中1殺人事件。被害者の少年はLINEを使って友達にSOSを発信していた。しかし、残念ながら凄惨な事件を防ぐことはできなかった。

会社の事務所で、近くに座っているのにメールでやりとりする同僚。互いに非難し合っている場合が少なくない。近くにいるなら面と向かって話し合えば良いのにと思う。

時空を越えるコミュニケーション手段に慣れるにつれて、人間は時空を共有する会話の力を失っていくのだろうか。同じ時に同じ場所にいるからこそ伝えられることがある。自分の声帯が空気を振動させたとき、相手に伝わるメッセージは文字情報に留まらないのだから。

1世紀前には、聴覚障害者だった母と妻に囲まれて電話を発明したグラハム・ベルがいた。いま、脳波センサーの応用技術が進展している。近い将来、機械の支援によって、つくくみ氏が声を取り戻す日が来るかもしれない。

「一番大事にしてきた声を捨て、生きる道を選びました。私も声を失って歩き始めたばかりの1回生。皆さんと一緒に。こんな私だから出来る事。こんな私にしか出来ない事。そんな事を考えながら生きていこうと思います」。つくくみ氏が後輩たちに送った声なき言葉は、声帯を使わずして会場の空気を振動させていたに違いない。この度の入学式は、時空を共有することの意味をあらためて認識させてくれた。



佐谷宣昭 Nobuaki Satani

1972年生まれ。九州大学工学部建築学科卒業。2000年九州大学大学院人間環境学専攻博士課程修了、博士(人間環境学)。翌月起業。㈱パイブドビット社長CEO。明日の豊かな情報生活に貢献したいとの想いから、「情報資産の銀行」の必要性を説く。官公庁や都市銀行、小売業など10,096の事業者向け情報資産プラットフォーム「スパイラル(R)」を提供中。

株式会社パイブドビット
東京都港区赤坂2丁目9番11号
03-5575-6601(代表) <http://www.pi-pe.co.jp/>